

堀越二郎の作った名機「零戦」をもっと良く知るために

# 零戦の秘密

4 今もなお零戦、大空にあり、Flyable Zero Fighters、

16 零戦の凄さを解く――  
どうして生まれ、どう進化したか (解説 野原茂)

22 大空のサムライ：坂井三郎の空中戦  
エース・サカイと零戦、ラエにあり (文 秋本 寛)

30 堀越二郎生誕110周年記念企画展開催  
所沢航空発祥記念館と藤岡歴史館で

30 カラーで見る零戦の塗装とマーキング (作画と解説 二宮茂樹)

40 1995年、日本を飛んだ零戦 (写真と文 阿施光南)

48 零戦を買った男の大きいなる夢  
里帰り飛行計画

50 実物の零戦を見るならココへ――  
国内の零戦展示施設リスト (解説 佐藤正孝)

56 プラモデルの中の零戦――  
現行品すべて紹介します (解説 中村宏治)

64 珠玉の零戦模型――  
ウイング・クラブのミュージアムモデル (解説 中村宏治)

## 65 零戦トリビア 基礎知識集 (解説 松本時彦)



●零戦は「れいせん」と呼ぶ？それとも「ゼロセン」？ ●零戦と隼を見間違えた米軍 ●最大の武器は長く飛べること ●アメリカ軍は過小評価 ●零戦から逃げても敵前逃亡にあらず ●主翼の捻り下げってなに？ ●枕頭紙ってなに？ ●生みの親、堀越二郎ってどんな人？ ●飛行中の食事はどうしたの？ ●飛行中にオシッコがしたくなったら？ ●主脚の引き込みは左が先？ 右？ ●役に立たなかった無線機 ●本家の三菱製より中島製が多いって本当？ ●幻の零戦各型 ●なぜ後継機ができなかったの？ ●零戦で作った自転車 ほか

## 80 零戦と戦ったライバル戦闘機 (解説 松本時彦)

- 80 ブリュースターF2A バツファロー：米海軍
- 81 グラマンF4F ワイルドキャット：米海軍
- 82 グラマンF6F ヘルキャット：米海軍
- 83 ヴォートF4U コルセア：米海兵隊
- 84 ロッキードP-38 ライトニング：米陸軍
- 85 カーチスP-40 ウォーホーク：米陸軍
- 86 リパブリックP-47 サンダーボルト：米陸軍
- 87 ノースアメリカンP-51 ムスタング：米陸軍
- 88 ホーカーハリケーン：英空軍
- 89 スーパーマリンスピットファイア：英空軍
- 90 (枢軸国) ドイツ空軍メッサーシュミットBf109
- 91 (日本陸軍) 中島一式戦闘機「隼」

## 92 (資料編) 精密図面・零戦各型諸元性能表

堀越二郎の作った名機「零戦」をもっと良く知るために

# 零戦の秘密

C O N T E N T S

写真は真珠湾攻撃時の発艦シーンを模したウイング・クラブ製作1/144スケールの空母「赤城」と零戦21型。機ウイングクラブについてはP.64を参照。

# 今もなお零戦、大空にあり

## Flyable Zero Fighters

Photos by Frank B. Mormillo



大戦中、戦場に送り出された軍用機は、たとえ連合国といえどもフライアブル（飛行可能）な状態を維持し続けている機体はそう多くない。そうしたなかでは、日本海軍の零式艦上戦闘機が終戦から70年目を経ようとしている今日でも、5機が良好なコンディションを維持し、各地で飛行していることは幸運と言えるだろう。5機の飛行再開までの経緯やその後歩んだ道、また機体のオリジナル度はそれぞれだが、いずれも貴重な航空遺産であり、一日でも長く大空を飛び続けるための努力が関係者らによって続けられている。その成果の一端を、迫力ある空撮写真でお伝えしよう。



# 大空のサムライ エース・サカイと 零戦、ラエにあり

大空のサムライ 坂井三郎の空中戦 文秋本實  
イラスト・小泉和明プロダクション

## 前進基地ラエ

大戦中期、日本海軍戦闘機隊がポート・モレスビー攻撃の基地として使用したニューギニアのラエ飛行場は、もともとは、ニューギニアの各所にある金鉱山の小飛行場のひとつで、1927年に設けられ、主としてオーエン・スタンリー山脈中腹のコダ付近の鉱山の金鉱石を運ぶギニア航空の小型機が使用していたものである。

1937年の7月2日、世界一周飛行の途上のアメリカの女流飛行家アメリカ・イヤハート・パトナム夫人が、最後の難関に挑戦するため中部太平洋の孤島ホーランド島に向けて飛び立った飛行場としても知られている。

東側はヤシ林、西側と北側はジャングルに覆われており、その背後には高い山々がそびえていた。南側はフォン湾に面していたが、海を越えた向こうにはニューギニアの背骨と言われたオーエン・スタンリー山脈の峻険な山々が連なっていた。

南北に走る主滑走路が1本とその東側に補助滑走路が1本あるだけで、主滑走路は一応、1,200m級とされていたが、実質は800m前後で、幅は30m、もちろん舗装などはされていなかった。格納庫は海岸沿いの滑走路の脇にギニア航空時代のものが残っていたが、ラエ攻略時に日本軍の爆撃で破壊されてしまっており、零戦隊が進出したときは骨組みだけになっており使用できなかった。飛行場の東側の中央部に急造の指揮所と搭乗員の待機所が設営隊の手で設けられていた。

この飛行場に最初に進出したのは、第4航空隊の戦闘機隊で、占領翌々日の1942年（昭和17年）3月10日に河合四郎大尉以下11機が進出したが、そのなかには、西澤廣義一飛曹も加わっていた。後に日本海軍のトップエースとなった西澤も、このときは千歳海軍航空隊の戦闘機隊時代の

1942年2月3日に、ラバウル上空でカタリナ飛行艇を1機撃墜しているだけであったが、3月14日のホーン島攻撃ではカーチスP-40戦闘機4機を撃墜して一気にエースの仲間入りをした。

4月1日、4空戦闘機隊は南海軍航空隊に編入され、16日には台南空の本隊がラバウルからラエに進出してきた。そして25日には、ひと足遅れて台南空の先任搭乗員坂井三郎一飛曹も到着した。坂井は、すでに中国大陸で、単独で6機、協同で5機を撃墜していたが、5月2日に初めてポート・モレスビー攻撃に加わり、単独でP-40を2機撃墜したほか、1機を協同で撃墜した。

当時、台南空は、空母加賀の分隊長時代の1937年9月4日に上海上空でカーチスP-36ホーク戦闘機を撃墜して初戦果を記録した大ベテランの飛行隊長中島正少佐のもとに、坂



64機の撃墜記録を持つ日本海軍のエース、坂井三郎。昭和17年8月7日の戦闘で戦死の重傷を負うも生還。戦後の著書「大空のサムライ」（光人社）は世界で100万部突破の大ベストセラーとなる。

井や西澤のほか、河合大尉、山下大尉、笹井中尉、宮崎飛曹長、半田飛曹長、大木一飛曹、太田一飛曹、本田二飛曹などの猛者が名を連ねていた。

そして、ポート・モレスビーやラエの上空で壮絶華麗な空の戦いを展開、大きな戦果をおさめるとともに、笹井中尉の三段跳び撃墜をはじめ、かずかずのエピソードを残した。

## 敵地上空で編隊宙返り

そのひとつが、ポート・モレスビーの敵飛行場の上空での編隊宙返りである。

この前代未聞の離れ業をやったのは、坂井一飛曹、西澤一飛曹、太田俊夫一飛曹の3人で、首謀者は言うまでもなく、戦後、大空のサムライとして有名になった坂井であった。文句なしに軍紀違反となる行動であったが、その動機についてはこう述べている。

「開戦以来、列機として戦ってきた本田敏秋二飛曹が、5月13日に半田飛曹長とポート・モレスビーの偵察に出撃して戦死したのは、大きなショックでした。そして、これに追い打ちをかけるように翌日には大島一飛曹、17日には山口中尉と相次いで戦友たちが帰らぬ人となりました」

「これが戦争なのだ自分に言い聞かせても、心の中にあいた大きな穴



# 1995年、日本を 飛んだ零戦

写真と文・阿施光南



17年ぶりに二度目の里帰りを果たした栄エンジン付きの零戦52型「61-120」は茨城県竜ヶ崎と北海道の豊頃、鹿部で計4回の飛行ショーを実施。一緒に来日したかつての好敵手、ノースアメリカンP-51ムスタングとともに出現当時、世界を驚かせた飛行性能の一端と、変わらぬ美しい姿を披露した。

鹿部飛行場に近い北海道駒ヶ岳(標高1,131m)上空を旋回する零戦52型。下はフェリー途中の同機。

